みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

SER no.104; はじめに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008604

はじめに

野林厚志

本報告書は，国立民族学博物館で実施されてきた機関研究「人類学的歴史認識」に関連して開催された国際シンポジウム「東アジアの民族イメージ：前近代における認識と相互作用」において発表された研究報告ならびに討論を収録したものである。シンポジウムは2010年３月20日ならびに21日に開催し，国内より研究報告者４名，討論参加者６名，国外より研究報告者２名，討論参加者１名を迎えて実施した。このシンポジウムは，機関研究「人類学的歴史認識」の一つの研究班であった「ユーラシアと日本――交流とイメージ」（以下「交流とイメージ」）班によって計画されたものである。この研究班は同時期に並行して行われていた人間文化研究機構連携研究「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究」（以下「連携研究」）と連動しており，人間文化研究機構の法人化の第一期を通じてその研究活動を展開してきたものである。今回のシンポジウムでは，「交流とイメージ」における取り組みを通じて，各班員が今後，より問題を深化させていくべきであると考えている内容のうち，中国の周縁社会，中国と日本との結節点に位置する台湾，そして日本という３ヶ所の事例にしぼりこみ，研究報告ならびに討論を行った。

19世紀以降，アジアの諸地域において国民国家が成立していく過程において，国家の主体となった民族集団と，いわゆる周縁におかれ，同化もしくは従属の対象となってきた民族集団との間にはさまざまな関係が築かれてきた。中央と周縁との関係は，国民国家におけるそれぞれの人々の位置づけに大きく影響を与えていくことになり，中央側にたつ人間が他者をどのように位置づけていったかということがその背景として存在していた。例えば，19世紀末に日本の植民地統治を通して国民国家の一部を構成していくことになる台湾では，その前の時代にあたる中国王朝期に分類された先住諸民族の分類が，国民国家の中における民族の位置づけに少なからず影響を与えていた。国民国家の成立によって構築されていく民族関係，とりわけ，中央と周縁との関係はその前の時代におけるそれらの関係抜きでは十分に理解することはできない。同時に，周縁におかれた人々も中央に対する様々な認識やイメージを有していたことも事実である。これらは歴史資料に必ずしも十分に残されるものではないが，周縁にあった人々の口頭伝承，技術や芸能，物質文化，中央側が残した史料や民族誌，民俗誌を丹念においかけることによってもその手がかりを得ることはできるであろう。

「交流とイメージ」班において行われてきた研究の特徴には大きく２つのことをあげることができる。一つには，「交流とイメージ」班に属していた班員は「連携研究」においてはそれぞれ異なる研究班に属し，それぞれの専門分野や調査地域に関する調査，研究を民博外の研究者とともにとりくんでいて，「交流とイメージ」では，「連携研究」等で

それぞれが得た成果をもちより，分野や地域をこえた議論を行ってきたということである。もう一つには，フィールド調査と博物館資料の分析とに主軸をおいた研究を行ってきたことである。フィールド調査はシベリアを中心とする北東アジア，中国南西部，日本，台湾に展開していった。博物館資料の分析は，標本資料だけではなく，文書や映像，音響資料など，多様な形態の学術資料がその対象となった。

「交流とイメージ」において，主に調査，研究の対象としてきたユーラシア大陸の各地域では，いわゆる中央と周縁との交流がそれぞれの時代的状況に応じて生まれていた。交流は，交易，人口移動，技術や文化面での相互作用等，広範な範囲に及んでいたが，これらの相互交流に関する諸問題については従来，狭い地域範囲内で個別的に検討されがちで，しかも文明地帯から非文明地帯への一方的な流れとして捉えられる傾向があった。しかしながら，こうした問題をひもとくためには，いわゆる正史とよばれてきたものを対象とする歴史学だけではなく，より土地の人々にひきつけた歴史認識が必要となることは言うまでもない。それが，この機関研究で中心に据えた人類学的歴史認識という課題である。

周縁社会には文字による歴史記録がないことも多く，通常の歴史研究ではこうした問題にアプローチすることはきわめて困難となる。そこで，人類学の最大の強みであるフィールドワークにもとづき，個人の記憶や集団の記憶である口頭伝承，技術・芸能の伝承を分析の対象とし，また，人々の記憶方法やそれを語る方法（言説）に着目した調査，研究を行ってきたのである。また，民博が学術資料の宝庫であるという強みを活かし，民族標本資料の収集や映像・音響資料の作成を研究の課題にくわえて，多角的な視点をもって歴史認識の問題に取り組んできた。研究と博物館の２つの軸足をもつことによって可能になった調査や研究もこの機関研究では少なからず実施され，それらが展示会や土地における研究成果の公開といった形に結実していった(注)。

こうした研究を通じて，うかびあがってきた一つの結論は，有形，無形を問わず，現在の民族集団が生みだす，もしくは歴史的に生みだされてきたものには，中央と周縁，周縁間の関係を表象する要素が少なからず埋めこまれている可能性があるということであった。すなわち，中央と周縁との相互作用のなかで，現在の「伝統的」とよばれるものの多くが形成されていき，さらに，周縁部においても民族間の多様な相互作用が生じていたという仮説を「交流とイメージ」における議論の中で班員は共有することができたのであった。

本論集は，従前の問題意識をふまえたうえで，今後，班員が展開してくそれぞれの地域の課題をより明確にすると同時に，専門とする地域をこえた研究者間での議論を通して個々の地域における研究では気がつかなかった視点を引き出すことをねらいとして構成したものである。研究分野や研究の対象としている国，地域が異なる研究者の論考で構成されているため，書式，体裁が多少異なっていることはあらかじめことわっておき

たい。連携研究ならびに機関研究で得られた成果や知見を今後の研究につないでいくうえでの道しるべの一つとして本論集を位置づけることができるであろう。

注

こうした研究成果の公開は以下のようなものに代表される。
ワークショップ「映像で八月踊りを記録する」
　平成19年11月11日　奄美市立奄美博物館
研究フォーラム「『夷酋列像』と道東アイヌ」
　平成20年９月27日　北海道立北方四島交流センター
国際連携展示「百年來的凝視」
　平成21年６月９日～10月10日　台湾順益台湾原住民博物館
ワークショップ「鹿児島と奄美で『奄美大島の八月踊り』を見る」
　平成21年12月６日　鹿児島県歴史資料センター黎明館
　平成21年12月９日　徳島交流広場ほーらい館
　平成22年１月23日　和泊町立歴史民俗資料館
人間文化研究機構連携展示「アジアの境界をこえて」
　平成22年10月14日～12月７日　国立民族学博物館